

## 4000万人の頭痛

73

## 『小児の頭痛』第3回〜小児の頭痛体質とその他の身体症状について〜

文 清水俊彦

text by Toshiko Shimizu

概して脳の過敏性が生来高い片頭痛の体質を持つ子供はいくつかの特徴を持っています。この過敏性の高さは水面下でくすぶっていることもあれば、ある限界を超えると片頭痛の痛みとして表現されることが多いので、注意深く観察してゆくことが必要です。

片頭痛の発生機序にはセロトニンという神経伝達物質が大きく関わっています。まず体内の小腸で合成されたセロトニンが血小板という血液内成分により大脳に運ばれ、これが神経細胞内で不安定な動きをすると時に鬱傾向が生じます。さらに脳血管内で不安定な動きをすると脳血管の異常な拡張を生じ、結果、脳血管周囲の三叉神経を刺激してこの刺激情報が大脳に伝播して脳の興奮性が高まり、酷い場合には片頭痛の痛みとして表現されるのです。すなわち鬱病と片頭痛は土俵が異なるだけで、両方ともセロトニンの不安定な状態から引き起こされる疾患なのです。

特に小児の場合、このセロトニンで作動する大脳の神経細胞が未発達であるため、このセロトニンの変動を小腸

内で読み取ることが多く、春や秋など運動会や学芸会などの学校行事の多い時期は、セロトニンが不安定な変動を起しやすいつ時期でもあるため、連日の腹痛や下痢症状もしくは嘔気などの消化器症状を訴えると同時に、なんとなく気分が晴れず、頭が重たく学校に行く気分にならないなど、苦手な季節でもあるのです。

また学校行事の時は緊張の度合いも通常より増強するため、脳の過敏性が増大し、行事翌日の振替休校日にほつとして緊張がとけた結果、一気にこれらの消化器症状が出現し、嘔吐を繰り返す、いわゆる自家中毒や周期性嘔吐症を来しやすいのも特徴的です。さらに冬季に風邪やインフルエンザに罹患して高熱をきたす際も注意が必要です。高熱により過剰な刺激を受けた、元来過敏性の高い片頭痛体質の子供の大脳は、過剰反応を引き起こすことが多いのです。高熱であるにもかかわらず、異常に元気で気分が高揚しやすく、この大脳の過敏性の増大がある限度を超えると神経細胞間の情報伝達ミスが生じ、その結果、熱性けいれんを引き起

こすことすらあるのです。

特に過敏な大脳を持ち合わせている片頭痛体質の子供は、頭の良さも兼ね合わせているのですが、視覚的な変化にも過敏に反応するため、車や列車の車窓の移り変わる景色を眺めていると乗り物酔いすることも多いため、日常生活でも一工夫が必要でしょう。

## Profile

日本脳神経外科学会認定医、日本頭痛学会監事を歴任。日本頭痛学会認定専門医。東京女子医科大学病院脳神経センター頭痛外来客員教授、獨協医科大学神経内科学講座臨床准教授、一般社団法人グリーンケアパートナー理事。

ほかに、汐留シティセンターセントラルクリニック、阿見第一クリニック、小山すぎの木クリニック、マミーズクリニック、伊豆大島医療センターの頭痛外来を担当。

昭和61年3月日本医科大学卒業。学会活動をはじめ、NHK「きょうの健康」「クローズアップ現代」など、テレビ出演も多い。『頭痛女子のトリセツ』（マガジンハウス）をはじめ、頭痛関連の著書多数。



新刊「マンガでわかる 頭痛・めまい・耳鳴りの治し方」  
監修/清水俊彦 推薦/佐渡島庸平  
新紀元社 (1,080円(税込))販売中。